

水理実験センター報告第6号の発刊に際して

10年ひとむかしというが、5年という数字はその半分で、やはり節目のひとつと言えよう。水理実験センター報告はすでに第5号が刊行されており、今回、第6号を編集するにあたって、月並な言葉ではあるが、¹「足が地について来た。」という感を強くする。

すぎ去ったこの数年間のいわば、創設期は、大型水路・実験圃場・観測塔などの建設とそれに付随した観測機器の整備に精力のほとんどがつかされた。まことに大変の一語につきるものであったと思う。いま、第2代のセンター長として、創設期の大役を果たされた初代のセンター長井口正男教授と、それを助けたセンター員のみなさんに深い敬意を表したい。それとともに、いわば第2期に入ったセンターの活動をより一層各関連分野の研究に密着して展開させるよう、全力をあげて努力したいと思う。

大型実験施設は国内外の研究者の垂涎的である。これを使用して成果をあげるように努めることは、センターの使命でもある。利用者はもちろんセンター員ばかりでなく、関連各学系の教員、学生であり、それらの人びとの研究・教育に十二分に役立たなければならぬ。これらの研究・教育の成果が²目に見えて、あがってくることを期待している。

わが水理実験センターの施設は国の内外の注目を浴びているが、例えば、最近、中国科学院地理研究所でも同じような環境研究センターを作り、

熱収支・水収支観測システムを検討中とのことである。われわれが苦勞して造った観測施設が参考になることは、まことに喜ばしいことであるが、さらに、この観測施設を利用した研究成果もこれから国の内外の参考に供せられるような高い水準のものを発表してゆかねばならない。その意味で、われわれは、Environmental Research Center Papers No. 1 をさきに刊行することができたのは嬉しいことであった。この水理実験センター報告は、和文の小論文を集めた報告書であるが、別に大きなモノグラフ・学位論文・プロジェクト報告などは、英文で ERC Papers として並行して刊行してゆく予定である。

この第6号には、報文・資料・講演要旨の他に、過去のセンターの発展記録とも言える年表をつけた。創設期の歩みは、われわれ自身の反省の資料であるばかりでなく、今後、同じような施設を作る方々への参考にもなると思いまとめた次第である。

この報告の内容ばかりでなく、センターの施設・運営などいろいろの面への建設的な御意見を賜ればまことに幸いである。

1982年5月12日

水理実験センター長

吉 野 正 敏